

様式1

令和4年度 学校評価表

学校教育目標	未来を拓き 人間力豊かに 学び続ける高見っ子の育成		
--------	---------------------------	--	--

a ミッション	〇小中連携教育を基盤としたカリキュラム・マネジメントの推進による主体性・表現力の育成	a ビジョン	人間の根っこを育てる学校づくり
---------	--	--------	-----------------

尾道市立高見小学校

評価計画				自己評価				学校関係者評価			改善計画			
b 中期経営目標	c 短期経営目標	d 目標達成のための方策	e 評価指標	f 目標値	7月 g 達成値	1月 h 達成値	i 評価 度達成	j 結果と課題の説明	k 二次評価			l コメント	m 改善案	
									イ	ロ	ハ			
(主体性、 ・考 表 現、 力 幸 ・動 か る わ り の 育 成)	関わり合いを通じた主体的な学びの確立	児童が自ら学ぶための主体性と表現力の育成	カリキュラム・マネジメントを通して児童が主体的に課題発見・解決学習に取り組む授業づくりを進める。	理科・生活科における各単元の「主体的に学習に取り組む態度」における評価規準B評価以上の割合(評価規準に基づいた個々の児童の評価)	80	85	106	A	【結果】学年・月(単元)により、結果にはらつきは見られたが、概ね目標値に達する結果となった。 【課題】手立ての有効性を担保するためにも、「主体性」についての評価の精度(信頼性・妥当性)を常に検証維持していく必要がある。 【結果】学年・月(単元)により、結果にはらつきは見られたが、概ね目標値に達する結果となった。 【課題】表現を促す(何らかの表現につながる)支援だけではなく、表現の質の向上や、より自発的に表現できる意欲や態度の育成が必要である。 【結果】全体平均値で目標値を達成できなかった。 【課題】目標値を下回った学年については、特に算数科に課題がある。算数に苦手意識があり、粘り強く取り組む事が難しい児童や、下学年時の内容の理解定着ができていない児童など、個々の課題に応じたより丁寧な補充学習を進めていく必要がある。	3	0	0	・結果と課題が明確にされているのは大変よいと思う。 ・「…結果にはらつきが見られたが…」とあるが、それはある意味自然であり、トータル的に考えればよいと思う。 ・「『主体性』についての評価の精度…」とあるが、それは当然としても評価の難しさは残ると思う。論理的ではないが、教師の経験による直感的評価も大切にしてほしい。 ・「表現の質の向上」「…意欲や態度の育成が必要…」の観点は正しく、その通りだと思うが、意欲や態度は日常的な取組、生活のあり様から生まれ、身につく要因もあり、その意味から学校の教育風土、教師の力量や姿勢が大きな意味を持つと思う。 ・「算数に課題がある」ことを数値的に判断し、その理由、背景、要因、今後の取組を考えているのは大変よいと思う。 ・「下学年時の内容の理解定着ができていない」ことは、児童が将来、中学・高校へ進学しても課題として残ることであり、個への対応を頑張ってもらいたいと思う。 ・基礎学力をつけるってほんとに大切で、大事で、しかもしんどい子にとってはむずかしいと思います。下校時刻の表を見ながら、その時間はどこで取るのだろう…と感じました。 ・子どもからの情報しかないので、細部の評価は難しいです。個人的に思うことは、小学生の時に、得意・不得意教科ができると思うので、苦手教科がなくなるような魅力的なカリキュラムが多くなればよいと思います。	・「カリキュラム・マネジメント」の一環として作成している教科・領域の関係図を引き続き活用・改善することなどを通じて教育課程(カリキュラム)の一層の改善に引き続き取り組むことで日常の授業でより効果的な学習ができるようにしていくとともに「主体性」についての評価の精度(信頼性・妥当性)を高めていく。 ・教師が「本質的な問い」を意識しながら授業を計画実践することで、「主体的に学び」「積極的に表現する」原動力となる「なぜ学ぶのか」「この学びを通して何を求めるのか」といったことを明確にし、児童が学習の「必然性」や「有用性」を意識して学ぶことができるようにする。 ・児童一人一人つまづきを把握し、解消してあげるよう、引き続き誤差の分析やそれに基づく個別指導を丁寧に行うとともに、情報を全校で共有し、つまづきを生まない日々の授業作りを取り組むとともに児童の一人一人に即した手立てを講じることで個々の課題に応じたより丁寧な補充学習を進め学習のつまづきを解消していく。 ・上記3点の取組をより有効なものとするため、今後も目的や学年段階に応じ、ICTの効果的な活用を図る。
			論理的に表現できる児童を育成するために、理科・生活科を中心においた研究を行う。	各単元におけるまとめ・表現したもののB評価以上児童の割合	80	81	102	A						
			基礎的・基本的な学力を高めるために、補充学習を行う。	国語科・算数科単元末テスト(読・判・表)における単元末テスト問題通過率80%以上の児童の割合(80%以上)	80	76	95	B						
自己を振り返り、よりよく生きようとする態度の育成	人との関わり合いを通じて、自他のよさを認め合う人間関係の形成	「しまっこくさ」を基盤とし、縦割り班活動や学校行事等を通して、自分のよさに気づき、友達のよさを感じられる児童を育成するとともに、自他のよさを具体的に表現できるようにする。	縦割り班活動や学校行事後の児童の振り返りで、自他のよさに気づいている児童の割合(児童振り返りカードに具体的に記述する。)	80	[自]77 [他]93	[自]96 [他]116	B A	【結果】学年が上がるほど自己肯定感の高い児童の割合が低下する傾向にある。また、自己肯定感の非常に低い児童が一定数存在する。一方、友達に関する肯定感が高く、他者のよさを見つける活動(劇)の有効性がうかがわれる。 【課題】自己肯定感の低い児童の状況を把握し「自己のよさ」を実感できる活動を仕組んだり、気づきを促す動きかけを行ったりする必要がある。 【結果】「早寝」について、目標値をわずかに(0.2ポイント)下回った。 【課題】目標の就寝時間よりも遅くなっている児童が低中学年が多い。メディアとの関連や家庭の生活状況が影響していると考えられる。 【結果】全体では目標値をわずかに(0.6ポイント)下回った。また、日常的に学級遊びに取り組んでいる3・4年生の数が相対的に低い。 【課題】体を動かすことの意義を理解したり、その心地よさを感じ取ったりすることができるよう支援していく必要がある。	3	0	0	・自己肯定感に関する調査、結果の分析はよくできており、課題が明確になっているのも大変よいと思う。学校教育目標に「未来を拓き」とあるその「未来」を子どもたちはどう考えているのか、また、保護者の思いはどうなのか、子どもたちは社会からどういう影響を受けているのか分析してほしい。 ・体を動かすことへの肯定感と生活リズムチェック表との関連はどうなのだろうか。人間は動物であり、動物は「動くもの」である。特に児童期において体を動かすことは体力増進のみならず、脳力や感性を養い発達させることに大きな意味があると考ええる。体を動かさなければ観念的になり、事実から離れ、世界も広がらない。 ・友だちとの距離をとりながらあそぶって、今の時代、ほんとにむずかしいことだと痛感しています。 ・個人的には上記のことよりこちらの育成の方が重要度が高いと思います。ここが整っていれば上記にもつながってくると思います。 ・評価表では「課題」を明確に分析し、今後の取組の方向が示されていることは大変よいと思う。		
			成果を実感できるよう、めあてを意識して、振り返りをさせる。	生活リズムチェック表において、早寝・早起きを達成できた児童の割合	80	[寝]80 [起]90	[寝]100 [起]113						B A	
			自らの生活を振り返り、よりよく生活しようとする態度の育成	体を動かすことに肯定的な児童の割合(児童アンケート)	80	79	99						B	
		運動好きな児童を増やし、体力を育むために、積極的に外遊びができる機会をつくる。	体力が向上した児童の割合(体力テストの再実施の結果)	80	-	-	-							

【自己評価 評価】
A: 100≦(目標達成)
C: 60≦(もう少し) < 80
B: 80≦(ほぼ達成) < 100
D: (できていない) < 60

【外部評価】 イ: 自己評価は適正である。ロ: 自己評価は適正でない。ハ: わからない。